講義ノート

伊藤幹夫

平成11年 6月 3日

Chapter 1

はじめに

この授業では、経済変動に関する諸理論を解説・敷衍する。

経済変動は普通、経済成長(Economic Growth)と景気循環(business cycle, economic fluctuation)に大きく分けられる。前者は経済成長理論、後者は景気変動論で扱われる。ただし、最近の研究では両者を同時に扱うことも多い。そのため上の分類は便宜的なものと考えるべきであろう。

さて、経済成長理論は主に産出量についての上昇的趨勢を扱い、そうした趨勢の定性・定量的性質を研究する。後に触れるが、戦後の先進諸国の経済では、産出量その他経済変量の趨勢的な動きにある程度の共通パターンがみられた。経済成長理論はそうした定型的事実を説明する理論的枠組みとして考えられた。

ただし、もう少し問題を広げて、経済成長を産出の持続的上昇とみるとき、それが持続可能か否かを問うということも有り得る。特に、環境問題や資源問題を前面に押し出して、持続的な経済成長が可能かを問うことが、近年重要になってきたといえる。この問題は、時間があれば触れる。

理論的には、産出量の時間経路が、ある一定の均衡成長経路に近づく傾向を持つか、あるいは、そうした時間経路の持つ成長率のような特性値を定める要因はなにか等の諸問題を取り扱う。かつては、ケインズ経済学の延長として、需要面に着目する理論が多かったのに対して、最近では生産面での技術進歩と経済成長の積極的関連に注目する理論も増えてきている。

これに対して、景気変動論は産出の循環的変動を問題にする。戦後の日本経済のように、ほんの短期間をのぞいてマイナス成長を経験しない先進諸国も多い。つまりマクロ的な生産水準そのものが循環的変動をすることは、最近はあまりない。実際にいう景気変動とは、景気動向指数を含む様々な経済指標によって捉えられる生産活動の変動、または、産出量の成長率の変動を指す。

景気変動論は景気変動の源泉を明らかにしようとする。しばしば取り上げられるのは、生産者の投資行動と経済変動の関連である。また最近では、生産面での確率的ショックが経済変動に大きな原因になっているという理論もある。これはマクロ経済学における供給面の重視という流れとも大きく関係している。

以下、前期の授業において経済成長理論を扱い、後期の授業で景気変動理論を扱う。順

番には特に意味はない。実際、前期と後期の授業内容には、それほどの連続性がない。

なお、具体例としてしばしば日本経済、あるいはアメリカ経済をとりあげる。